

P-1 犬猫腫瘍症例報告からみたがん看護の現状と問題点

○勝又夏歩¹⁾、久田松朋花¹⁾、丸尾幸嗣¹⁾

1) ヤマザキ動物看護大学

序文

伴侶動物医療において、がんの症例が多くなっている。しかし、動物看護学は発展途上であるため、がん看護に関する文献は非常に少ない。そこで、動物がん看護の現状を調査するため、犬猫腫瘍症例報告を読み、どのような看護が行われているかを把握した上で、動物がん看護の現状と問題点について考察した。

材料および方法

腫瘍症例報告のうち、個体情報が得られやすいと考えられる1例報告に限定し、20症例を選抜した。選んだ犬猫腫瘍症例報告20例について、1.腫瘍の種類、2.動物種、3.性別、4.年齢、5.主訴、6.治療の種類、7.治療効果、8.副作用および有害事象、9.QOL、10.看護のポイントと問題点について注目し、整理分析および考察を行った。

結果

腫瘍の種類は良性腫瘍2例、悪性腫瘍18例、犬15例、猫5例であった。性別は雌4例、避妊雌8例、雄1例、去勢雄7例であった。年齢は1歳から17歳までに分布し、8歳以上のシニアが16例、8歳未満が4例であった。主訴は全身症状から局所症状まで様々であった。治療は、外科療法16例、化学療法9例、放射線療法2例、その他2例であり、併用して治療をしているケースが11例であった。治療の結果、生存が10例、死亡が10例であった。治療によるQOLは、15例が低下、5例が低下しなかった。

考察

今回の症例からも明らかのように、8歳以上のシニアが多く、がん罹患した高齢動物は、がん以外の疾患を併発していることが多いので、がん以外の併発疾患へのサポートも必要になると考えられた。重症で来院された症例の主訴では、飼い主が異常に気付くのが遅いと感じることがあった。常日頃から異常症状などを飼い主にあらかじめ伝えておくことで、早期治療に取り掛かることができると思われた。治療が長引くことで、動物や飼い主にとってつらく長い看護生活を強いられることになるため、動物医療スタッフとの信頼関係が必要不可欠になる。また、半数が死亡していることから、終末期ケアについて、飼い主へのインフォームドコンセントが重要であると思われる。20例中15例でQOLの低下がみられた。がん治療においてある程度のQOL低下は仕方ないが、QOLを極力維持して生活を送ることが出来るようにすることが、動物看護師の役割の一つであると改めて考えさせられた。